

インフラの 町医者

全8回の3
をどう育てるか

第9回建設トップランナーフォーラムより

第一部「複業と技術革新
による産業の創出」では、
「エコハウスとエネルギー
革新」と題して工藤建設

(岩手県)の工藤一博氏、
「在宅支援ハウスと介護
事業への展開」と題して
瀬戸建設(神奈川県)の
瀬戸良幸氏、「移設可能
な大地の螺子基礎」と題し

て大見海事工業(青森県)
の大見義紀氏が事例発表し
た。

◇ ◇

ドイツパッシブハウス研
究所が規定する性能基準を
満たす認定住宅・パッシブ
ハウスは、躯体性能を上げ
省エネ設備を利用すること
で快適性と省エネ性を追求
したエコハウス。工藤建設

た奥州パッシブハウスを
「画期的で、日本でナンバ
ーワンの家」と自負する。
「東北初のパッシブハウ
スを建築し、建築関連事業
者とのネットワークを構築
できている。建物に関する
相談窓口になることで、地
域の『インフラの町医者』
の役割を担えるのでは」と
話す。



工藤社長

(岩手県奥州市)の工藤一
博社長は、自社の自然エネ
ルギー利用技術を取り入れ

さらに、低コスト化や住
民の信頼性の獲得、社内体
制の整備など現段階の課題
を挙げながら、「家づくり
の先に何かあるのか。一つ
の工務店での範囲までカ
バーできるのか」など、時
間的・空間的な考察の必要
性も訴えた。

低コスト化が課題に

地域特性踏まえた事業計画



瀬戸社長

「このままでは生き残れ
ない」。1995年ごろ
から地域建設投資の縮小傾
向が鮮明となり、厳しい状
況に危機感を持った瀬戸建
設(神奈川県小田原市)の
瀬戸良幸社長は、約3年に
わたって全社員の意識改革
を行った。2000年の介
護保険制度成立を機に介護

・福祉・医療分野へ進出。
既存の土地や建物を活用し
た高齢者福祉施設の企画立
案や設計施工、運営に乗り

出した。

国交省の新分野進出モデ
ル事業に採択された高齢者
住宅在宅支援ハウスをほじ
め、日本最大級の複合木造
となった有料老人施設・整
形外科の複合施設、遊休地
の土地所有者をまとめて有
効活用した介護付有料老人
ホームなど、15年で150
棟以上の土地利用を行っ
た。

28億円ほどに下がって
いた売上高が40億円近くに
まで伸びた成功のポイントに
ついて瀬戸社長は「地域の
特性や背景をしっかりとら
えて企画を提案し、事業計
画をつくるのが重要」と
話した。

「移設可能な大地の螺子
基礎」をテーマに講演した

大見海事工業(青森県大間
町)の大見義紀社長は、防
雪柵や太陽光発電設備など
の基礎に幅広く活用できる
「GTSパイラル工法」の
販売・施工に取り組んでい
る。この挑戦の背景には
「本州最北端の過疎地に所
在する専門工事業が今後も
存続していくためには、新
技術という武器を持つこと
が不可欠」という強い思い



大見社長

大見社長は「工法を認知
してもらったための営業活動
や信頼性を高める努力を続
ける」ことで、さらなる業
績拡大を目指して挑戦を続
けていく。

(地方建設専門紙の会)

持続可能な専門工事業へ